



生活変革者を育てる 家庭科

1

家庭科なんて要らない!?

現代の家庭科は、様々な個性やライフスタイルをもつ人たちの人権を尊重し、共にかかわりながら生きることについて問う。

- ・子どもは一人で大きくなれる?
- ・高齢者を支える地域活動には、誰がかかわっているの?
- ・ケガや病気で働けなくなった時、お金の心配をしなくてもいい仕組みとは?
- ・レインボーフラッグが伝えるメッセージは何?
- ・名字を変えたくない人が大切にしている生き方とは?

家庭科は、年齢、性別、国籍、障がいの有無等がハードルにならない、誰もが自分らしく生きられる社会の在り方を、日常生活を切り口に科学的かつ実践的に学ぶ教科なのである。

ところが、筆者は最近、高校生にこう言われたことがある。「今どき料理とか裁縫とか古いですよ。私は家政学部には行きませんね。」(女子)「大学で家庭科なんてやる必要があるんですか?」(男子)。

聞けばこういうことだ。料理なんかしなくても、スーパー、コンビニで何でも買える。服だって作るより買った方が安い。これからの女子は家庭科よりIT系かも。会社で役立つ資格が取れる大学が良いと親も言っているし……。かれらは筆者に決して挑発や悪ふざけで言ったのではない。真剣に自分の思いを伝えてくれたのである。

かれらの言葉から、筆者はこんなこと考えずにはいられない。それは、現代社会が私たちの個人・家庭生活の営みを、「大したことない」「なくても困らない」「誰でもできる」ものと捉えてきたのではないか、あるいは「見えないもの」として扱ってきたのではないか、ということである。

マンガ家の田房永子氏は、上野千鶴子氏との対談

で、私たちが暮らす社会は「A面」(会社・学校等)と「B面」(妊娠・出産・家事・ケア等)に分かれると述べ、それをイラストで表現した(上野・田房, 2020)(図1)。人間は、本来、A・B両面を行き来しながら生きている。しかし生産性・効率性優先型社会は、A面に男性、B面に女性を位置づけ、B面を勝手に排除あるいは無視してこなかったか。そのような社会では、私たちが食べたいものを自分で調理したり着続けたい服を繕ったりすることも、子どもの世話をしたり遊んだりすることも、近所の人と挨拶をしたり回覧板を渡すことも、「無駄」なのであろう。

そんな社会は本当に豊かな社会なのか。

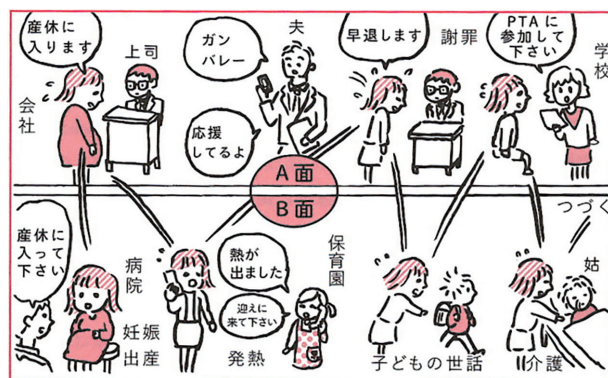


図1 生活のA面とB面(上野・田房, 2020より)

2

家庭科だからできること

○生活体験を根拠に様々な人々の抱える課題に気づく

家庭科では、A・B両面を行き来する私たちの生活について、家族・家庭生活、衣食住、消費生活・環境等、幅広く学ぶ。そして学習者は、そこで多様な人々の暮らしについて考えたり、実際に生活体験をしたりするからこそ、見えてくることもある。

「人間がケアを必要とするのは、乳幼児期と高齢期だけじゃない」「お金も大事だけど、健康に暮らすためには料理も洗濯も困らんも必要」「いくら親

密な間柄でも、暴力は許されない」

そこで学習者は、家庭科で身につけた目線（安心・安全・快適・平等）で改善策を提案し、家庭・地域・社会の仕組みを変えてきた。この点を教科として堂々と主張できる教科は家庭科以外にない。

だからこそ家庭科に携わる者は、児童・生徒一人ひとりがそのようなことができる力を持っていることを、授業を通してかれらに伝え、社会はあなたの体験と考えと行動で変わるのだと、絶えず語り続ける義務と責任があるだろう。

○生活体験を基に社会をアップデート

すべての人が安心して暮らせる社会の実現のために、家庭科ができることは沢山ある。例えば日常生活に潜む「無意識の偏見」をなくすことである。「男は仕事って誰が決めた?」「家事・ケアは女の仕事? みんなの仕事だよ。」(図2)



図2 無意識の偏見 (市川房枝記念会、2023より)

こんな話し合いもできるはずだ。「社会には、赤ちゃんも高齢者も、障がいのある人も、外国から来た人もいるね」「みんなそれぞれの暮らしや考え方があるね」「それぞれ、いろんな困りごとを抱えているよ」「そういうことをわかって、みんなの声を社会に届けてる人ってどんな人?」「どんな人だったっけ?」「いろんな人、いたっけなあ...」

3

生活変革者を育てる

今話題のAIは、どうすればよりよい社会になるか、聞けば答えてくれる。しかしAIには大切な誰かを想ってご飯を作った経験もなければ、放っておけない大事な人の相談に、自分事としてのった経験もない。そんなAIと、家庭科をきちんと学んだ児童・生徒が描く社会が同じはずがない。(図3)

どんな議会がいいと思う?

今の議会

A 男性9割：女性1割



女性の声は、届くの?

※2021年衆議院議員選挙より算出。全国地方議会女性議員割合14.8%に基づき男性5人。

逆転させると

B 女性9割：男性1割



今度は男性の声が届かなそう?

理想はこんな議会

C 女性5割：男性5割



前より良い感じ!

さらにこんな感じなら素敵じゃない?

D 多様な声が反映される議会



図3 どんな議会が良いか (市川房枝記念会「すしPリーフレット」、2023より)

私たちは家庭科を学べば生活することの大切さ、面白さ、奥深さが分かる（もちろん大変さもある）。

しかし私たちが、大切さ、面白さ、奥深さを感じながら生活するためにはある程度の時間的、精神的、経済的な余裕も必要である。もしも現代社会が、そのような余裕を私たちに与えず、その余裕のなさを自己責任だと宣うならば、家庭科はそんな社会にNO（持続不可能）を突きつけよう。

共通テストに出題されなくても、主要教科でなくても、それがどうした。家庭科に携わる我々は、多様な人々の生き方を学び、生活の実体験を通して個人・家庭生活の意義と価値を理解し、誰もの尊厳を守る社会に向けて共創の挑戦をやめない生活変革者を育てているのである。



高知大学教育学部附属特別支援学校での出前授業

<引用・参考文献>

- ・上野千鶴子・田房永子「上野先生、フェミニズムについてゼロから教えて下さい！」大和書房、2020
 - ・公益財団法人 市川房枝記念会 女性と政治センター「すしPリーフレット」<https://www.ichikawa-fusae.or.jp/suship/>
- ※ 「すしP」は、市川房枝記念会にて無料配布中（2023年7月現在）

国立大学法人高知大学教育学部教授。
博士（生活環境学）。高知大学教育学部附属特別支援学校の家庭科の先生方とジェンダーの共同授業も行う。

森田 美佐（もりた みさ）

